『パーソナリティ研究』に投稿する意義

加藤 司

『パーソナリティ研究』機関誌編集委員長

『パーソナリティ研究』はわが国の心理学を牽引している学術雑誌であり、いまや、わが国における心理学関連のトップ雑誌にまで成長しました。残念ながら、そのような事実を知らない人たちがいるかもしれません。そのような人たちは、このエディトリアルを読むことで、『パーソナリティ研究』がわが国を代表する学術雑誌であることを理解することができるでしょう。このエディトリアルでは、『パーソナリティ研究』に掲載されることが、研究者にとって多くのメリットをもたらすことを説明します。

第2次世界大戦後、科学論文は前年度比8%から9%の割合で増加しており（Bornmann & Mutz, 2015）、これらの論文の投稿先を、投稿者がどのような基準によって選んでいるかという問題は、投稿者にとっても、雑誌の編集委員や出版社にとっても重要なことです。投稿者は「掲載さえすれば、どんな雑誌でも構わない」と思っているはずはありません。そこでこのエディトリアル

では、投稿する雑誌の選択基準（投稿基準）に沿って、『パーソナリティ研究』に掲載される意義について説明したいと思います。研究者たちの投稿基準は、研究者によるアンケート結果である The 2015 Author Insights Survey（Nature Publishing Group & Palgrave Macmillan, 2015）によって知ることができます（Table 1）。

どのような雑誌が優れているのか

The 2015 Author Insights Surveyでは、これまでのアンケート結果に基づいて作成した投稿基準に対して、およそ21,000名の研究者に「とても重要」「かなり重要」「とても重要とは言えない」「重要ではない」から選択させています。Table 1には、「とても重要」あるいは「かなり重要」を選択した研究者の割合が高い5つの投稿基準が示されています。「雑誌のインパクトファクター」に関しては、90%の科学・技術者が、78%の人文・社会学者が、投稿基準として「とても重要」あるいは「かなり重要」と回答しています。科学技術者と人文・社会学者との間には、インパクトファクターの重要度に違いはあるものの、雑誌のインパクトファクターが投稿基準のひとつである点では一致しています。

同調査によれば、投稿者にとって最も重要な投稿基準は「雑誌に対する世間の評価」でした。しかし、「雑誌に対する世間の評価」を決める最も重要な要因を尋ねると、最も多くの研究者たちが雑誌のインパクトファクターをあげていました。つまり、投稿者にとって最も重要な選択基準は、

Table 1 投稿雑誌を選択する際の重要度第1位から第5位—「とても重要」「かなり重要」を選択した研究者の割合（%）

選択基準	科学・技術者 (n=18,354)	人文・社会学者 (n=3,023)
雑誌に対する世間の評価	97	96
投稿者の学問分野との関連性	95	97
査読者の質	92	88
雑誌のインパクトファクター	90	78*
雑誌のリーダーシップ	88*	89

注. The 2015 Author Insights Survey（Nature Publishing Group, 2015）のデータにより作成した。

* グラフから推定した値。

雑誌のインパクトファクターなのです。

このような研究者の投稿動向は、別の研究からも知ることができます。例えば、最近発表された van Dijk, Manor, & Carey (2014) の研究では、およそ 25,000 名の研究者について PubMed を利用して調べたところ、インパクトファクターの高い雑誌に第一著者として論文を掲載していることが、研究者として重要なポストである *principal investigator* を獲得できるかどうかにかき与しており、その寄与度が最も高いことがわかりました (*principal investigator* は比較的大きなラボのリーダー職で、このポストを獲得できた研究者は全体の 6.2%)。また、最近 PLoS ONE 誌に発表された Paulus, Rademacher, Schäfer, Müller-Pinzler, & Krach (2015) の実験結果もまた、研究者にとってインパクトファクターがいかに重要であるかを物語っています。このように、雑誌のインパクトファクターは研究者にとってとても重要な投稿基準なのです。

あまりにも自明なことなので、説明するのも恥ずかしいことですが、インパクトファクターは被引用回数をういた最も代表的な客観的評価指標 (雑誌に対する評価) であり、実際、国際誌のトップページには、最新のインパクトファクターが掲げられています。近年ではわが国でも、研究職の採用や昇進に関する人事書類にインパクトファクターをはじめとする被引用回数に関する客観的評価を記載することは珍しくなくなってきました。被引用回数が雑誌の評価指標の中心であり、現在でもその重要性はゆるぎないということに異論を唱える研究者はいないでしょう。そこで、『パーソナリティ研究』のインパクトファクター (被引用状況) の現状について説明します。

第2位のインパクトファクター

加藤他 (2015) のデータから、『パーソナリティ研究』の 1998 年から 2010 年までのインパクトファクターの推移を Figure 1 に示しました。

Figure 1 『パーソナリティ研究』と『心理学研究』のインパクトファクターの推移を示した。IF はインパクトファクターを意味する。加藤他 (2013, 2015) のデータにより作成した

Figure 1 には同時期の『心理学研究』のインパクトファクター (加藤他, 2015) も参考として加えています。さらに、『パーソナリティ研究』を含めた心理学関連雑誌の 2008 年から 2010 年のインパクトファクターと自誌引用率を Table 2 に呈示しました。『パーソナリティ研究』のインパクトファクターを解釈する前に、加藤他 (2015) のインパクトファクターについて少し説明しなければなりません。このインパクトファクターは、トムソンロイター社が提供しているインパクトファクターではありません。残念ですが、トムソンロイター社が提供しているデータベース (Web of Science®) に『パーソナリティ研究』は登録されておらず (2016 年現在)、当然インパクトファクターも算出することはできません。それゆえ、和文雑誌のインパクトファクターを知るためには、トムソンロイター社とは異なるデータベースが必要になります。加藤他 (2015) のインパクトファクターは、PsychoFinderJ (加藤他, 2013) というデータベースを用いて算出したものです。PsychoFinderJ には心理学関連の和文雑誌 34 誌と約 23,900 篇の論文に関する情報が含まれています。PsychoFinderJ に収録されている論文に引用

Table 2 それぞれの雑誌のインパクトファクターと自誌引用率 (%)

雑誌名	順位	インパクトファクター			自誌引用率 (%)		
		2010	2009	2008	2010	2009	2008
教育心理学研究	1	0.48	0.41	0.41	22.9	45.2	37.4
認知科学	2	0.28	0.11	0.10	88.5	40.0	66.7
パーソナリティ研究	3	0.27	0.32	0.31	29.2	37.5	43.2
行動療法研究	4	0.24	0.21	0.31	38.9	42.9	70.6
行動分析学研究	5	0.23	0.35	0.19	54.5	33.3	57.1
心理学研究	6	0.22	0.17	0.23	20.3	18.8	11.9
発達心理学研究	7	0.21	0.22	0.35	36.7	43.3	34.9
実験社会心理学研究	7	0.21	0.10	0.10	18.8	57.1	42.9
家族心理学研究	9	0.19	0.09	0.05	100.0	50.0	100.0
社会心理学研究	10	0.18	0.22	0.24	14.3	20.0	14.3
感情心理学研究	11	0.17	0.19	0.32	0.0	66.7	54.5
健康心理学研究	12	0.15	0.12	0.11	60.0	12.5	87.5
心理臨床学研究	12	0.15	0.10	0.15	65.9	72.4	81.4
認知心理学研究	12	0.15	0.07	—	25.0	0.0	—
カウンセリング研究	15	0.14	0.19	0.25	45.8	33.3	56.5
特殊教育学研究	16	0.12	0.16	0.11	12.5	72.7	82.4
神経心理学	16	0.12	0.16	0.07	87.5	100.0	80.0
行動計量学	18	0.10	0.02	0.18	66.7	100.0	50.0
心身医学	19	0.09	0.09	0.11	73.3	66.7	52.4
青年心理学研究	20	0.08	0.25	0.28	0.0	60.0	20.0
心理学評論	20	0.08	0.19	0.13	14.3	20.7	38.1
応用心理学研究	20	0.08	0.05	0.03	40.0	0.0	0.0
動物心理学研究	23	0.03	0.07	0.04	100.0	50.0	100.0
バイオフィードバック研究	23	0.03	0.04	0.32	100.0	100.0	100.0
生理心理学と精神生理学	25	0.06	0.08	0.13	0.0	50.0	42.9
産業・組織心理学研究	26	0.05	0.14	0.17	100.0	60.0	16.7
基礎心理学研究	27	0.02	0.14	0.14	0.0	16.7	16.7

注. 加藤他 (2015) のデータにより作成した。順位は2010年のインパクトファクターの値に基づく。

—は創刊年が若いために値を算出することができないことを意味する。

された論文をカウントしたものが、このエディトリアルで紹介した加藤他 (2015) のインパクトファクターです。また、トムソンロイター社の通常のインパクトファクターの被引用期間が2年間であるのに対して、このインパクトファクターの被引用期間は5年間であることにも注意を払う必要があります。

Figure 1を見ると、創刊当初の『パーソナリティ研究』のインパクトファクターは『心理学研究』よりも低かったものの、2002年頃より徐々に上昇し、2006年頃より『心理学研究』の値を超えて推移していることがわかります (『パーソナリティ研究』の創刊年が1993年ですので、被

引用期間を5年間としたインパクトファクターは1998年から計算されます)。つまり、『パーソナリティ研究』はインパクトファクターの値を年々上げ、最近の『パーソナリティ研究』は、少なくとも『心理学研究』より頻繁に引用されている雑誌であると言えます。さらに、ここ最近のインパクトファクターの値を『心理学研究』以外の雑誌と比較すると、『パーソナリティ研究』のインパクトファクターは常に上位5雑誌の中に入っており、ここ2年間では常に上位3雑誌に位置づけられています (Table 2)。インパクトファクターは変動するため、単年の値だけを見て判断することは適切な解釈方法ではありません (Amin &

Mabe, 2007)。そのことを考慮に入れ、ここ数年間のインパクトファクターを見ると (Table 2), 『パーソナリティ研究』は心理学関連雑誌の中で2番目に高いインパクトファクターであると解釈できます。

インパクトファクターを解釈する際には、自誌引用率に関しても触れておかなければなりません。『パーソナリティ研究』を例に挙げると、自誌引用率は被引用回数のうち『パーソナリティ研究』の掲載論文による引用回数が占める割合を意味しています。この値が高すぎる場合、たとえ論文が掲載されても、掲載された雑誌以外の雑誌には引用されないことを意味し、他の領域に影響を及ぼさない雑誌と判断することができます (ここで紹介した自誌引用率の場合は心理学関連雑誌内では引用されないことを意味します)。『パーソナリティ研究』は創刊当初こそ自誌引用率が高かったものの、2003年頃まで年々減少し、自誌引用率は20%近くまでになりましたが、その後一時的に上昇し、最近では再び低下しています (Figure 2)。『パーソナリティ研究』の自誌引用率は『心理学研究』よりも高いようですが、『心理学研究』以外の他誌と比較すると比較的低い値であり (Table 2)、自誌以外の心理学関連雑誌から引用さ

れていると考えることができます。

Google Scholar Citationsでも第2位

『パーソナリティ研究』の被引用回数について、別の指標からも見てみましょう。Google Scholar Citationsを用いた独自の指標 (h5-indexとh5-median) に基づく雑誌のランキングがあります (Google Scholar, 2014, 2016)。Google Scholar Citationsのランキングによれば、『パーソナリティ研究』は和文雑誌 (大学紀要を含む) のうち第60位 (2016年) でした (Table 3参照)。このランキングによると、2016年の『パーソナリティ研究』は心理学と密接な関係のある雑誌のうちで第2位です (h5-indexの値は第1位である『教育心理学研究』と同値)。100位以内にランキングしている雑誌のうち、心理学と関係の深い雑誌は『パーソナリティ研究』を含め3誌だけでした。

Table 3 Google Scholar Metrics (Google Scholar, 2014, 2016) による和雑誌ランキング—心理学に関連する雑誌ランキング

2016年	2014年	雑誌名
3	18	情報処理学会論文誌
10	4	人工知能学会論文誌
17	6	理学療法科学
18	34	理学療法学
20	37	日本公衆衛生雑誌
24	30	人工知能学会誌
31	33	情報処理学会論文誌 (論文誌ジャーナル)
38	24	Audiology Japan
47	62	日本老年医学会雑誌
52	17	教育心理学研究
60	61	パーソナリティ研究
67	66	リハビリテーション医学
68	68	心理学研究
84	99	BRAIN and NERVE
94	—	日本労働研究雑誌
97	85	日本教育工学会論文誌
—	78	保健医療科学

注. Google Scholar Metrics (Google Scholar, 2014, 2016) の上位100位の和雑誌のうち、PsychoFinder (加藤他, 2013) に収録されている論文に引用された頻度が比較的高かった雑誌のみ抽出した。心理学との関連性の強い雑誌はゴシック体で表記している。

Figure 2 『パーソナリティ研究』と『心理学研究』の自誌引用率 (%) の推移を示した。加藤他 (2013, 2015) のデータにより作成した

Table 3 には、Google Scholar Citations によるランキング (第100位まで) のうち、PsychoFinderJ (加藤他, 2013) に収録されている論文に引用された頻度が比較的高かった雑誌を抽出し、その順位を示しています。

この指標を解釈する際にも、いくつかの点で注意が必要です。Google Scholar Citations のランキングの基になっている指標 (2014年のh5-index) は過去5年間 (2009年から2013年) において、ある雑誌に掲載された論文のうち、被引用回数がh回以上の論文がh篇存在することを意味しています。『パーソナリティ研究』のh5-indexは5であり、2009年から2013年に引用された論文のうち、5回以上引用された論文が5篇、『パーソナリティ研究』に掲載されていることを意味します (2014年のh5-medianは10であり、その5篇の論文の被引用回数の中央値は10回です)。それゆえ、掲載論文数の多い雑誌ほど、Google Scholar Citations によるランキングが高くなる潜在的可能性が増します。『パーソナリティ研究』と比較して、掲載論文数の多い『心理学研究』『教育心理学研究』は、このランキングでは有利になります。逆に、『パーソナリティ研究』より掲載論文数の少ない雑誌は不利になります。

さらに、Google Scholar Citations そのものに起因した問題もあります。Google Scholar Citations はインターネットを利用し、学術論文と思われる論文に引用された回数をカウントします。そのため、Google Scholar Citations にはWeb of Science® やPsychoFinderJのようなデータベースはなく、どのような雑誌に引用されたか考慮されていません。例えば、ある研究グループの研究129篇を引用した偽の論文6篇を作成し、インターネット上で公開した研究 (López-Cózar, Robinson-García, & Torres-Salinas, 2014) では、偽の論文によって引用されているにもかかわらず、Google Scholar Citations は偽の論文による引用をカウントしてしまいました。結果としてDaniel Torres-Salinas

氏 (研究グループの一員) のGoogle Scholar Citations による被引用回数は227回から416回に増加し、h-indexは9から11に跳ね上がりました。実際に、Google Scholar Citations は書籍、大学紀要、ハゲタカ出版による引用でさえもカウントしてしまう一方で、インターネットから引用情報を探ることのできない場合、いくら質の高い雑誌に引用されようと、Google Scholar Citations によってカウントされることはありません。そのような問題があるものの、『パーソナリティ研究』は心理学に直接関係している雑誌の中では第2位ですから、投稿先として価値の高い和文雑誌であると言えます。

極めて高い評価

投稿先の基準として「雑誌に対する世間の評価」が重要であることはThe 2015 Author Insights Surveyからもわかります。しかし、雑誌に対する世間の評価を客観的に示すことは困難です。心理学関連の和文雑誌に関して言えば、古くから活躍している研究者たちは『心理学研究』(1919年創刊) や『教育心理学研究』(1953年創刊) を高く評価しているかもしれません。これらの雑誌は古くに創刊されており、かつては一定の評価を得ていた時期があったからです。それらの雑誌に対して『パーソナリティ研究』は、心理学関連の和文雑誌の中では新参者で、1980年代に次々と新しい雑誌が創刊され、その流れの末期に出版された雑誌と言えるかもしれません (Table 1, 加藤他, 2015参照)。それゆえ、『心理学研究』や『教育心理学研究』を敬う研究者の中には、『パーソナリティ研究』をこれらの雑誌より格下に思っている者もいるかもしれません。

しかし、The 2015 Author Insights Survey の研究者アンケートを思い出してください。雑誌に対する世間の評価を決める最も重要な要因は雑誌のインパクトファクターです。このことから、いまや、『パーソナリティ研究』は世間から高い評価

を得ている雑誌ということが出来ます。

雑誌の採択率はその雑誌の評価と関係があるかもしれません。必ずしもそうではありませんが、採択率の低い雑誌の質は評価の高い雑誌であり、あまりにも採択率の高い雑誌に対する評価は低いかもしれません。J-STAGEによる新投稿システムに移行してから、私が編集委員長に就任するまでの『パーソナリティ研究』の採択率は、原著（展望・資料論文を含む）で56.8%，ショートレポートで57.8%です（これらの値に査読に回されず不採択になった論文が含まれていないため、実際の採択率はこの値より低い）。比較対象にはなりませんが参考までに、American Psychological Associationが主幹する雑誌である *Journal of Personality and Social Psychology* 誌の採択率は11%，*Psychological Assessment* 誌は25%です（American Psychological Association, 2014）。

総合雑誌として

The 2015 Author Insights Survey からわかるように、投稿者は「投稿者の学問分野との関連性」もまた、投稿先を選ぶ重要な基準として捉えています。このエディトリアルを執筆している最中に、私が投稿したある論文に対して、3つの雑誌から投稿してからわずか2,3日で不採択の通知が送られてきました。理由はどの雑誌も同じで、「投稿した論文はこの雑誌の範疇ではないため、査読に回すことなく不採択にする。この判断は投稿論文の質と関係ない」というものでした。このように、雑誌の掲載範疇は投稿雑誌の採否と密接な関係にあることが一般的です。投稿した論文が、雑誌の範疇であるかどうかは、投稿先を決めるうえでも重要なことですが、それと同時に、どの領域に自身の論文を掲載させたいと思っているかも、投稿者にとって重要なことです。この場合、私はこの投稿論文を精神医学系の雑誌に掲載させたかったため、査読に回されない可能性があることを知りつつも精神医学系の雑誌に投稿し続けまし

た。4度目の投稿は、心理学寄りの雑誌に投稿することにしました。

『パーソナリティ研究』に話を戻しますと、創刊当初は性格に関する研究を掲載する雑誌として位置づけられており、現在においても『パーソナリティ研究』は創刊当初の発行目的そのものに大きな変更はありません。しかし、創刊から時間が経過し、心理学界における『パーソナリティ研究』が期待される役割が変化してきました。心理学の総合雑誌として、心理学界を牽引するという使命も担わなければならなくなったのです。先に明示した通り、『パーソナリティ研究』のインパクトファクターが年々上昇し、いまや心理学関連雑誌のトップレベルであるという事実がそのことを示しています。読者は、性格の研究者から、パーソナリティに関係する研究者、心理学に関わる研究者へと拡大し、こうした読者たちの変化に沿い、『パーソナリティ研究』はパーソナリティの専門誌から、パーソナリティに関連する心理学総合誌に変化してきました。

それゆえ、『パーソナリティ研究』に掲載された論文は、現在、パーソナリティの専門家だけではなく、心理学に関心を持つ幅広い研究者たちに読まれています。投稿者は自分自身の学問分野との関連性を考慮に入れて投稿先を決めたいと思っています。『パーソナリティ研究』は、こうした投稿者の希望を叶えることのできる雑誌だと思います。

高い査読者の質

最近では査読内容を公開する雑誌も増加しており、査読（peer review）の在り方は常に注目を集めています（Couzin-Frankel, 2013; Lee, Sugimoto, Zhang, & Cronin, 2013; Kondro, 2016; Mervis, 2014; Park, Peacey, & Munafo, 2014 など）。『パーソナリティ研究』の査読者たちの質は一様に高いことは、他誌と異なる特有のシステムからうかがい知ることができます。多く和文雑誌では査読者

を編集委員が選定するのに対して、『パーソナリティ研究』では査読は原則として編集委員に依頼します。それゆえ、『パーソナリティ研究』では、投稿者は投稿前に査読される可能性のある査読者を知ることができます。加えて、『パーソナリティ研究』の査読者（編集委員）たちは、編集委員として適切かどうか日本パーソナリティ心理学会の常任理事会で審議され、総会でも報告されます。多くの和文雑誌の査読者は編集委員の独断によって決定されています。この点を考えただけでも、『パーソナリティ研究』の査読者の質に対する透明性は他誌と比較して高いと言えます。さらに、少なくとも私が機関誌編集委員長に就任して以降、査読者（編集委員）を選出する際、その人物の研究能力を重視するようにしています（これまでの機関誌編集委員長がそうではなかったということではありませんし、これからの編集委員長の方針がそうであるということを保証するわけでもありません）。国際誌に論文が掲載されるような研究者には、若くとも査読者に推挙しています。別の雑誌では、研究者の能力ではなく、学閥や年齢によって編集委員が選ばれるようなことがあるという話を聞きますが（あくまで噂であり、事実かどうか定かではありません）、『パーソナリティ研究』では質の高い査読を行うことのできる査読者（編集委員）が選出されます。査読を通じて投稿者たちの能力が高まること（Mervis, 2016）も考慮に入れるならば、質の高い査読を行う『パーソナリティ研究』は、投稿者にとって第一選択雑誌であるかもしれません。

結 論

これまで説明してきた研究者たちの投稿基準から考えると、『パーソナリティ研究』は国内トップレベルの質の高い雑誌であり、投稿先として第一選択に位置づけられている雑誌です。そのため、『パーソナリティ研究』に採択されたとするならば、国内で最高の雑誌に掲載されたことにな

ります。また、『パーソナリティ研究』に不採択になったからといって気に病む必要はありません。査読者たちのコメントを参照に論文を修正したうえで他誌に投稿すれば、採択されるかもしれません。

最後に、機関誌編集委員長がその職務を適切に遂行しているかどうかはまた、投稿に影響を及ぼすひとつの要因であるかもしれません。「査読は適切に行われているか」「査読に遅れが生じていないか」など、現在少なくとも週に1度は必ずすべての論文をチェックしております（編集委員の仕事はほぼ毎日やっています）。必要があれば遅延している査読者を交代させています。また、投稿論文の採否に関しましても、投稿者の不利益にならないよう慎重に実行しています。例えば、2名の査読者が「不採択」、残り1名の査読者が「採択」の判断を下した場合であっても、安易に「不採択」の判断を下したり致しません。編集委員長として再度詳細に論文と査読者のコメントなどに目を通します。その結果、新たな査読者を加える場合もあれば、2名の査読の結果を覆し「採択」とする場合もあります（今後の編集委員長が同様の対応を取るかどうかは保証できません）。

『パーソナリティ研究』への投稿をお待ちしております。その際は、第25巻第1号のエディトリアル（加藤, 2016）を参照すると採択の可能性が高まります。

引用文献

- American Psychological Association (2014). Summary report of journal operations, 2013. *American Psychologist*, 69, 531–532. doi: 10.1037/a0036753
- Amin, M., & Mabe, M. (2000). Impact factors: Use and abuse. *Perspectives in Publishing*, 1, 1–6.
- Bornmann, L., & Mutz, R. (2015). Growth rates of modern science: A bibliometric analysis based on the number of publications and cited references. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 66, 2215–2222. doi: 10.1002/asi.23329
- Couzin-Frankel, J. (2013). Secretive and subjective, peer

- review proves resistant to study. *Science*, 341, 1331. doi: 10.1126/science.341.6152.1331
- Google Scholar (2014). Google Scholar Metrics: ランキングの高い出版物 (日本語) Retrieved from https://scholar.google.co.jp/citations?view_op=top_venues&hl=ja&vq=ja (June 26, 2014)
- Google Scholar (2016). Google Scholar Metrics: ランキングの高い出版物 (日本語) Retrieved from http://scholar.google.com/citations?view_op=top_venues&hl=ja&vq=ja (July 15, 2016)
- 加藤 司 (2016)『パーソナリティ研究』に採択される方法——投稿論文の問題点とその対応策—— パーソナリティ研究, 25, 1-9. doi: 10.2132/personality.25.1
- 加藤 司・馬場真美子・太幡直也・下田俊介・大久保暢俊・福田美紀 (2015) 2000年から2010年までの主要心理学27誌のインパクトファクター *Kato's Lab Paper*, KL2015-001. Retrieved from <http://katolabo.web.fc2.com/KL2015-001.pdf> (July 15, 2016)
- 加藤 司・馬場真美子・太幡直也・下田俊介・福田美紀・大久保暢俊 (2013) インパクトファクターからみた“心理学研究”の評価 心理学研究, 84, 146-155. doi: 10.4992/jjpsy.84.146
- Kondro, W. (2016). In Canada, peer-review changes stir outrage. *Science*, 353, 112. doi: 10.1126/science.353.6295.112
- Lee, C. J., Sugimoto, C. R., Zhang, G., & Cronin, B. (2013). Bias in peer review. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 64, 2-17. doi: 10.1002/asi.22784
- López-Cózar, E. D., Robinson-García, N., & Torres-Salinas, D. (2014). The Google scholar experiment: How to index false papers and manipulate bibliometric indicators. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 65, 446-454. doi: 10.1002/asi.23056
- Mervis, J. (2014). Peering into peer review. *Science*, 343, 596-598. doi: 10.1126/science.343.6171.596
- Mervis, J. (2016). A peek at peer review helps young scientists. *Science*, 352, 1379. doi: 10.1126/science.352.6292.1379
- Nature Publishing Group & Palgrave Macmillan (2015). The 2015 Author Insights Survey. Retrieved from https://s3-eu-west-1.amazonaws.com/pfigshare-u-files/2214482/SUMMARY_2015AuthorInsightsSurvey2015Aug17.pdf (August 17, 2015)
- Park, I., Peacey, M. W., & Munafò, M. R. (2014). Modelling the effects of subjective and objective decision making in scientific peer review. *Nature*, 506, 93-96. doi: 10.1038/nature12786
- Paulus, F. M., Rademacher, L., Schäfer, T. A. J., Müller-Pinzler, L., & Krach, S. (2015). Journal impact factor shapes scientists' reward signal in the prospect of publication. *PLoS ONE*, 10(11): e0142537. doi: 10.1371/journal.pone.0142537
- van Dijk, D., Manor, O., & Carey, L. B. (2014). Publication metrics and success on the academic job market. *Current Biology*, 24, R516-R517. doi: 10.1016/j.cub.2014.04.039

Why Submit Your Next Paper to the “*Japanese Journal of Personality*”?

Tsukasa KATO

Editor-in-Chief, Japanese Journal of Personality
Faculty of Sociology, Toyo University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2017, Vol. 25 No. 3, 183-190